# 天龍川鳴たち

杨与 任智子

# 目次

はじめに	3
1. 下伊那のアオサギ	5
2. アオバト	13
3. カワウの飛来	18
4. 昔の下市田河原	22
5. 人も鳥も	24
1) 食物連鎖とはいいながら	24
2) 放置された釣り針	25
3) カラス	29
4) ハクセキレイ	29
5) カ モ	31
6) 天竜川ふれあいサミット	32
7) 河川改修に望むこと	35
おわりに	36

# はじめに

私は下伊那の天竜川の東側、つまり竜東地区の山村で育ち、現在もこの土地で暮しています。天竜川のほとりに出るには段丘を下りなくてはなりません。子供の頃から「天竜川」と聞いて思い浮べられるのは、

- \* 竜西の商店街へ買い物に行ったり、大きなイベントに参加したり、また重要な 用件を足しに行くためには、水神橋などの橋を渡って、天竜川を越えなくては ならない。
- \* 舟下りの港があり、行楽シーズンには大勢の観光客が訪れる。
- \* 天竜川が氾濫する度に沿岸の住民は大きな被害を受け、大人たちの会話から 「暴れ天竜」という言葉を覚えた記憶がある。

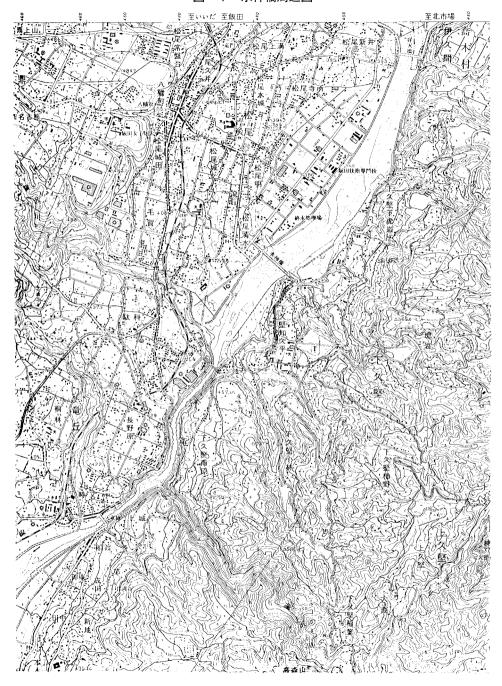
という程度の関わりでしかありませんでした。必要があって天竜川に架かるいくつかの橋を渡ることはあっても、水遊びなど、その下を流れる水を直接に利用した覚えもありません。ましてや、その水辺に生息する生物や植物、河川敷や堤防に捨てられたゴミなどに対しても関心など全くありませんでした。

ところが、そんな私が9年前の2月に、雪の中にたたずむ1羽のアオサギを見かけたことから、思いもかけず天竜川と深い関わりをもつようになりました。鳥学にも天竜川にも何の意識や知識も持たない全くの素人の私でしたが、このことがきっかけで飯伊地方のアオサギについての観察を行うことになり、家事や仕事の合間をみつけては、場防や水辺を歩きまわるようになったのです。

当初はただアオサギの姿を追い求めて記録を取るだけの日々でしたが、その内に、アオサギだけでなく他の水辺の鳥を含めた様々なものが目に入り、それらに対する関心も徐々に広がるようになりました。ありがたいことに、鳥を通して大勢の方々から声をかけて頂いたり、知識豊かな先輩たちにも恵まれ、情報交換をしあえる仲間もできました。ますます鳥への関心度も高まるばかりとなっていったのです。

このように素人である私が、専門分野で活躍されている諸先生方と同じシリーズに名を連ねるのは非常に心苦しく、また気恥かしさをも覚えますが、9年の間に味わった感動的な出来事や、心を痛めたことなどをありのまま記録の中から拾い出してみたいと思います。

図-1 水神橋周辺図



# 1. 下伊那のアオサギ

1988年2月に、天竜川の弁天橋下流(飯田市松尾)で1羽のアオサギを発見した。その後、付近の天竜川を歩いてみると、他の場所でも数羽の個体を発見することができた。そのことを、当時娘の担任でもあった日本鳥学会会員の大原均先生に話したところ、「この地方にアオサギが生息していることは今までにも報告はされているが(『長野県の野鳥』羽田ら、1980)、どのくらいの数の個体が生息し、どんな生活をしているのかなど、詳しいことはまだ調べられていない」とのことであった。

また北海道のウトナイ湖のサンクチュアリで野鳥のチーフ・レンジャーとして活躍中の大畑孝二さんに、北海道のアオサギについて、生活の様子などをお尋ねしてみた。それによると、現地ではアオサギは集団でねぐらをとったり、繁殖しているということだった(『ぼくは野鳥のレンジャーだ』大畑1987,『北限のアオサギを守る』松田1982、参照)。

そこで、この地方にも集団ねぐらや繁殖のコロニーはあるのだろうか、海や湖がないこの地方では、どんな生活をしているのか調べてみようと思い、最初に発見した1988年2月から1990年12月までの間、天竜川に出現するアオサギを中心に、その生息状況を調べてきた。今回報告するのは、出現個体数の季別変化と生息場所、群れサイズの季別・日周変化など4項目である。

# a. 調査場所および調査方法

調査を行ったのは、天竜川とその周辺の耕地や支流である。最上流部を下伊那郡豊丘村河野と高森町山吹に架かる万年橋、最下流部を飯田市の天竜峡として、 その範囲内に出現するアオサギを観察した。

不特定な時間に、調査地内の堤防や河川敷を歩き、あまり影響を与えない程度の距離から双眼鏡(X8)やフィールドスコープ(X20)を使用して、個体数や行動などの観察を行った。

毎月平均で10日ほどの調査日数だったが、所要のために、場所によっては調査の時間や回数に偏りが出てしまった。

# b 結果および論議

#### ① 出現個体数の季別変化

この地方のアオサギは、季節によって出現する個体数にかなりの違いが見られたので、比較的密度の高い弁天橋から水神橋までの範囲(約 $2.5 \, \mathrm{km}$ )に限って、出現した個体数の季別変化を図にまとめてみた(図-2)。ここに示した各ポイントは、 $5 \, \mathrm{OH}$ のうちでもっとも数の多かった数値をその時期の個体数として表している。年によって多少の違いはみられるが、 $3 \, \mathrm{F}$ ともかなり似た傾向がみられた。

8月下旬から9月の上旬頃になると、この場所にアオサギの姿が見られるようになり、段々個体数は増加していき、10月頃になるとその数は20羽前後となる。その後、翌年の2月頃まで多少の変化をしながらも、比較的安定した数の生息を確認することができた。

ところが3月に入ると、この場所のアオサギの個体数はだんだんと減少をはじめ、やがて4月の中旬になると姿を確認することができなくなった。その後、8月下旬にまた姿をみせるまでの約4か月半、この場所では確認することができなかった。

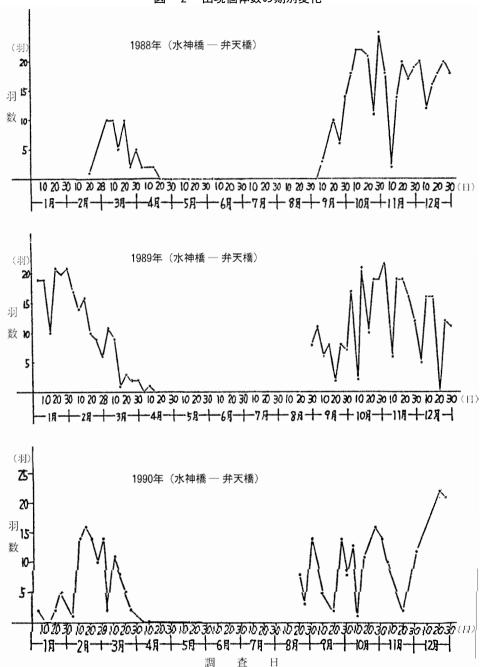
同地点より上流にあたる明神橋から少し上流の河原においては、1989年の5月頃から8月にかけて5~6羽の個体を確認することができたが、この時期には下伊那地方のアオサギの数は極端に少なくなる。

以上のことから、次の2点について考えてみたい。

一つは、アオサギの下伊那地方の個体群の年間を通しての動きである。3年間の観察の結果、この地方のアオサギは、夏の終わりから秋になるとどこからともなくやって来て、そのまま冬を過ごし、春になると徐々に飛び去って数を減らし、夏の間はほとんど姿を見せなくなるということが分かった。この変動のパターンは、一般に冬鳥といわれる鳥の移動のパターンと同じである。ただし、渡来する時期が早いこと、夏の間にも稀ではあるが姿を見かけることから、距離的にはあまり大きな移動ではないと思われる。しかし、夏の間の移動先はどこであるかは、91年現在つかめていない。

二つ目は繁殖の可能性はあるか、という問題である。現在までの調査・情報では、営巣の事実や、親の子育て行動といった繁殖に結び付く観察例や報告は何も

図-2 出現個体数の期別変化



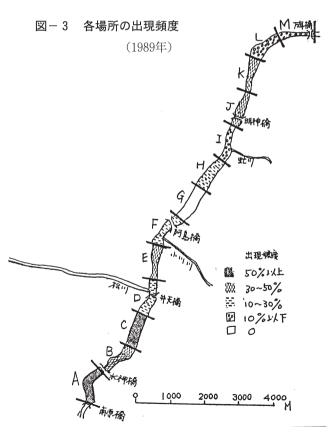
ない。ただ前述のように繁殖時期と思われる季節に、明神橋の上流で5羽前後の個体が安定して出現することから、「もしかしたら営巣をしているのではないか」と思い、その場所で各個体の行動観察や、付近の河川敷の樹林で巣探しを試みたが、繁殖に結び付く結果は得られなかった。

以上のことから、現在の段階ではこの地方でのアオサギの繁殖は行われていないと考えられるが、まだ断定はできない。

#### ② アオサギの生息場所

一概に天竜川といっても、水の流れている場所、砂や礫の広がっているところ、草や木の生えている場所など、様々な環境が入り組んでいる。それに伴っ

て、アオサギの出現 頻度にどのような違 いが出てきている か、図-3に示し た。調査の対象とし た南原橋から万年橋 まで、の区間を便宜 的に1kmずつに区切 り、それぞれの部分 のアオサギの出現頻 度を5段階に分けて 図示したものであ る。この場合の出現 頻度は、1989年の1 年間に各パートを調 査した同数で出現同 数を割った数値で求 め、羽数は考慮して いない。これを見る と、弁天橋から南原 橋を中心とした部分



と、明神橋付近に出現頻度の高い部分が集中している。

反対に出現頻度が低かった場所は、万年橋付近と明神橋から阿島橋の間の部分であった。何故アオサギの出現頻度が場所によってこのような違いが出てくるのかについては、今後も調査を続けてみたい。

### ③ アオサギの群れサイズ

アオサギを見ていると、ある時は1羽でいたり、又ある時は数羽でいたりと集まっている数に違いがある。そこで群れサイズがどのようにして変化しているのかまとめてみた。この場合、群れとは約10m以内に近付いた上、お互いに排除しようとする行動が見られなかった集団とした。

その群サイズが1989年から1990年にかけて、季節によってどのように変動していったのかを図-4にまとめてみた。これからも分かるように、秋から冬にかけては3羽以上の群れでいることが多いが、春から夏にかけてはほとんどが1羽で暮すようになる。このことは、春から夏の間は各個体の排他性が強くなるために、お互いに攻撃できない距離を保っているのか、前述のようにこの時期の個体数が少ないために必然的にお互いが離れ離れになるのか、それとも秋から冬の間には集まった方が有利なことがあるのか、どんな要素が群れサイズを決定しているのかは、今後の研究課題である。

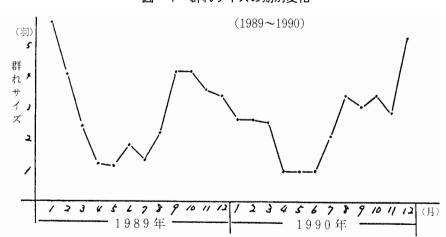
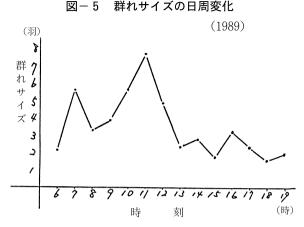


図-4 群れサイズの期別変化

次に群れサイズの変動を1日の時間的変化でまとめてみた(図-5)。これを見ると、朝と夕方は小さい群れか単独で暮し、日中には大きな群れで暮す傾向があることがうかがえる。この島が朝と夕方に採食行動が多くなることは、この鳥が朝と夕方に採食行動が多くなるのかもしれない。つまり食べる時



にはお互いに排他的になり、それ以外の時間には許容的になるのかもしれない。 いずれにせよ細かな行動と関係付けながら群れサイズを考えてみる必要がある。

#### ④ 第1報のまとめ

1988年から観察を続けてきた下伊那地方のアオサギについての第1報は以上の通りである。今回の観察で次の3点について明らかにすることができた。

- (1) 下伊那地方のアオサギは秋から冬にかけては生息する個体が多いが、春から夏にかけてはほとんど姿を見せなくなる。
- (2) 今回調査した天竜川の範囲において、出現頻度の高い場所と低い場所があった。
- (3) 群れサイズは朝と夕方は小さいが、日中は大きくなる。

しかし、この他にもいくつか問題が残された。例えば、非繁殖期の集団ねぐらの問題、この地方における繁殖の可能性の問題、河川改修および魚釣りとそれらからの保護の問題などである。

また、暗くなってからも川の中にいる個体を数回にわたり確認し、夜間の調査も試みた。その結果、確かに流れの中に立っていたり、浅瀬を歩き回る姿を認めることはできた。だが、その行動の意味については今の段階では何ともいえない。(1991年1月下伊那生物会発表)

#### ⑤ アオサギのねぐらと繁殖地

1995年現在、ねぐらと繁殖地については次の通りである。1990年9月4日に飯田市の下久堅と竜丘に架かる南原橋上から、約100羽のコサギのねぐらに10羽のアオサギが加わっているのを確認した。数日間観察を行っていたが、アオサギのいた場所へトビが来るようになり、やがてどこかへ移動してしまった。伊那谷のアオサギはそれほど数が多くないことや、夜間でも川の中にいたり、暗くなってからでも移動を行うことから、ねぐらとして目立った観察はできていない。

繁殖地については、自分の観察に加え、寄せられた情報も参考にしながら探し歩いてみた。まず、繁殖期にも毎年5~6羽を確認できる下伊那郡高森町と豊丘村の間の天竜川の中洲へ渡り、樹木などを調べてみたが、カラスの巣やコサギの羽は見つかったものの、アオサギの営巣の確認はとれなかった。また、下伊那郡天竜村平岡で木の枝をくわえて飛んでいるアオサギを見たという情報も寄せられ、喜び勇んででかけて行ったが、8羽を確認しただけで、巣らしき物は見つからなかった。その後も時々訪れてみたが、阿南町の南宮峡から天竜村平岡間の水辺などで、10羽程度を確認したものの、巣を見つけることはできなかった。

1993年5月に、県内でのアオサギ繁殖地として有名な野沢温泉村を訪れてみた。写真やテレビだけでなく実際に見れば、探すときの何か参考になるのではないかと思ったからだ。丁度運よく仕事の都合で長野市に住んでいた次女が同行してくれて、大助かりだった。



写真1 下市田河原の中洲へ集まったアオサギ(砂と同色で見分けにくい)

対岸から観察してみると、千曲川に面した樹木のてっぺんに、あるわ、あるわ、木の枝を組み合わせただけの、粗雑な皿型のかなり大きな巣が35~40位見え、約60羽のアオサギを確認できた。その巣では、ヒナあるいは巣立ち間際かと思われる幼鳥が親に餌をねだったり、羽ばたきの練習をしていた。

このときの様子を綴った私の投稿文を読んだ南安曇郡穂高町の男性から、自宅 前の松林にアオサギの巣が沢山あり、昼夜を問わず飛び交う姿を間近で観察でき るから来てみないかという、ありがたい情報が寄せられた。こんな嬉しい話を 放っておける訳がない。このときも現地に詳しい次女が同行してくれて、偶然と はいえ 2 度の幸運に恵まれた。穂高町の繁殖地は、水田や住宅に囲まれた平地の 松林にあり、40~50羽のアオサギと、約20巣を確認できた。茂みの中に入ると、 ペレット(魚の骨など不消化のものを塊にして吐き出したもの)や羽・卵の殻・ ヒナの死骸・骨などが散乱し、辺り一面に異臭が漂っていた。野沢温泉村のとき とは違い、平地にあるために巣の真下から見上げる形になり、間近で見られる巣 や親鳥・幼鳥などにも感激した。野沢温泉村と穂高町の営巣場所は全く異なった 性質の場所だが、両方に共通しているのは広々とした川や水田などがあり、採餌 に適した場所に恵まれていると考えられる。あれだけ大型のアオサギが、集団で 子育てをしながら自分の腹も満たすとなれば、1日にどれだけの餌を必要とする のだろうか。今の私には全く見当もつかないが、餌場にも恵まれた上に子育てに 適した環境となると、やはり限られた場所のみということになるのかも知れな 11

2 か所の営巣地を観察してみて、果たして伊那谷にこのような恵まれた環境があるのだろうかと、今まで自分が歩き回った場所を思い返してみた。

アオサギの繁殖期と、釣りが解禁になる時期とが重なる天竜川では、アオサギが集団営巣に耐えられるだけの魚は確保できそうにもないことが分かるし、この時期の日中、アオサギたちは川へ寄りつくこともできず、まだ釣人が川へ入らない早朝か、逆に釣人が帰った後の夕暮れ時、あるいは夜間に採餌している。またこの時期の日中、よく近隣の水田や堤などで姿を見かけることが多くなるのも、釣りと全く無関係ではないと思う。

アオサギの観察を始めた当初、1巣でもいいから伊那谷での営巣を確認したい と思い続けてきたが、これらの観察から考えて、やはり無理ではないかと思うよ うになってきた。

# 2. アオバト

# 1) 飯田市松尾周辺のアオバト

1994年の8月下旬、飯田市松尾周辺で約40羽のアオバトを見かけたことから観察・調査を始めて現在に至っている。

アオバトの背面はオス・メス共に緑色または黄緑色だが、オスのみ雨覆いの部分が赤い。首から胸にかけて黄色で、腹部は白が目立つ。「アーオ、アオアオ」と特徴のある鳴き声も知られている。名前の由来は、この独特の声からという説もあるが、定かではない。

6年ほど前から調べていたアオサギも一応一区切り付いたところだったし、以前から県内でのアオバトの繁殖・生態など解明されていない点が多いことを知っていたので、多少の興味も湧き、このアオバトの群れを追ってみようと思いついた。

この日見かけたアオバトの群れは、天竜川と松川の合流点の約100m上流付近の石の上に降りて、流れの水を飲んでいた。数分後、二つの群れに分かれ、松尾新井方面へ向かい、ある小さな木立に下りた。後を追ってみると、木立の周辺は住宅地・水田・食品製造会社・牛舎などが隣接している。アオバトの群れが降りた木立は、主にモミ・スギ・サワラが目につき、その下には墓地とお社がまつられている。

後日、改めて近辺での聞き込み調査や資料調査に加え、自分自身でも観察を行ううちに、次々に思いがけないことや面白いことがわかってきた。

先ず、アオバトは塩分を好む鳥であり、隣接しているK食品製造会社の敷地内へ下りて、駐車場にできた水たまりの水を飲むという情報が入ってきたのである。そこでこの食品会社の敷地内での調査を許可して頂くために数回足を運び、説明を重ねてやっと立ち入り調査の許可を得ることができた。幸いに従業員の中に数年前からアオバトの飛来を確認しているMさんという方がいて、話を聞くことができた。

その方の話では、 $5\sim6$ 年前に数羽が木立へ飛来し、年々羽数が増加してきたという。色鮮やかなこの鳥を図鑑で調べ、アオバトであることを知り、そのときに塩分を好む鳥であることも知ったらしい。会社で扱う材料からこぼれ落ちる塩



写真 2 水たまりの水を飲むアオバト (飯田市松尾)

が水たまりや砂地に混ざり、塩分を好むといわれるアオバトの絶好の塩分補給場所になっているのではないか、という話も聞かせて頂いた。

Mさんのおかげでアオバトについて、もっと詳しく調べてみようという意欲が湧いてきた。木立周辺を各方面から観察し羽数を調べてみると、毎日羽数に変化がみられ、1日のうちでも羽数の変動が激しいこともわかった。約30羽から最大羽数100羽を観察でき、通常は $50\sim60$ 羽を確認できる。夜明と共に、主に東西から集合してきて木立で休息し、リラックスすると「アーオ、アオアオ」と鳴き始めるが、全部が一斉に鳴くということはない。せいぜい  $2\sim3$  羽程度と思われる。鳴き方も「アーオ、アオアオ」の他に「ウーウ、ウウ、ウウ」と救急車のような声や、「ホーホ、ホ、ホ、ホ」と笑い声のようなものなど表現しにくい複雑な鳴き声も聞くことができる。木の下にじっと身を潜めて聞いていると、なかなか面白い。鳴くのはオスだけなのか両方なのか、今のところ確認できていないが、木のてっぺんや枝の先で鳴いているのを観察したのはオスのみだった。木立からじっと会社の様子をうかがい、チャンスを見つけては一斉に敷地内の地面に下りてくる。

だが、観察を重ねるうちに偵察の役目をするものがいることがわかった。 1~2 羽が飛び出し上空を一周すると、木立へ戻っていく。その後すぐ飛び出す群れもあれば、そのまま鳴いたり羽づくろいを続ける群れもある。



写真3 群れで飛翔するアオバト (飯田市松尾)

地面に下りたアオバトを初めて間近で見たときは、キジバトやドバトのような 地味な色と違い、あまりの鮮やかな色彩に驚いたものだ。写真では説明されてい なかったり、高い木の上にいる時は見落としていたが、くちばしの水色が美し く、後ろ向きになった個体の尾羽根は、白と濃いこげ茶の斑模様があり目立つ背 面や腹部とはかなり対照的だった。落ち着いて足元まで観察すると、足首の辺り まで羽毛に覆われている。歩く姿を正面から見ると、まるでズボン下を履いたお じさんがオイチニ、オイチニと歩いてくるようで、ユーモラスでもあり可愛らし い。

地面やコンクリートの上にできたわずかな水溜りへ群がり、夢中になって水を飲む。水の中へくちばしを突っ込み、ゴクゴクともいえるほどの飲み方をする個体もある。かと思うと水たまりの中へ入り込み他の仲間から追われる個体や、水飲みに熱中しているメスを追い回すオスもある。食品会社敷地内での行動は、水飲みだけではない。地面の砂粒を盛んに拾っては食べてしまうのだ。よほどおいしい餌でもあるかのように拾って食べる。

9月中旬には、砂粒を拾う群れの中で、しつこくメスを追い回すオスの姿があり、交尾と思われる行動も数回確認した。これは後日、鳥類の専門家である大原均先生に質問したところ「はっきりはわからないが、2羽だけが群れと離れて行動していれば番いとも考えられるが、群れの中でのそうした行動は疑似交尾とも

思われる。キジバトは冬でも繁殖するが、今のところアオバトのデータが少な く、特に繁殖については何ともいえない。| という答えが返ってきた。

休息場所として、キジバトやドバトのように電線や屋根に下りてきたところを 私はまだ一度も確認していない。下りたのを見たのは、この松尾新井の木立か、 松川や天竜川の河川敷内にあるニセアカシヤやヤナギなどである。

アオバトが集まる水たまりや砂地を調べてみると、無数のフンがある。紫色で、ドロッと粘り気があり、中から桜の種子が出てくることが多かったが、もちろん季節によって異なる。緑色をしたフンもあったり、時々砂粒、それも相当大き目の粒が混ざっていることもあった。餌場を探す手がかりになればと思い、フンの内容物を拾いフィルムのケースに集めてある。やはり桜は種類も多くて、咲く期間にも差があるせいか一番多い気がする。フンの中の種子によって、桑の実や様々な果実を採食していることはわかるが、植物に暗い私には果実の種類を同定し、その植物の生えている場所を探すことができない。発芽させて樹種を調べようと思い種をまいてみたが、なかなか発芽しない。やっと数本の芽が出て喜んだのも束の間、真夏の暑さで枯れてしまった。いずれにせよアオバトの生態を知るためには、どこで何を食べているのかは重要な調査になる。

神奈川県の照ケ崎海岸で、海水を飲むアオバトを調査している斉藤常実氏が種子に関する図鑑を紹介して下さった。今度その『原色日本植物種子写真図鑑(石川茂雄著)』を飯田市立図書館で購入して下さったので、今後はおおいに利用させて頂くつもりでいる。

1994年には、10月下旬に1羽だけが残り、やがて30日以降この1羽も姿を消した。1995年は、5月上旬から数羽ずつ飛来し始め、10月には最高約100羽までに達した。6月頃になると木の上ではオスのディスプレーらしき行動も数多く観察できた。メスに近付いては尾羽根を上下に振ったり、翼をひろげて自己PRするかのような動作をくり返す。地面へ下りたときに交尾行動も見られ、現在最も重要なテーマである繁殖への期待を持ち始めている。

1994年の秋、 松尾のアオバトが新聞やテレビで紹介された折りに、高遠の方から「毎年営巣・繁殖する場所を知っている。」という情報が入った。過去に「繁殖期と思われる時期に、山の奥で鳴き声を聞いたが巣は見つからない。県内での生息は観察されているが、繁殖についての詳しい報告や確認がない。」という内容の話を聞いたり読んだりしていたので、一度訪ねてみたいと思っている。

-16-

ほかにも各方面の方から「果樹園に鳴いていた」とか「繁殖期に○○山の裏側で声を聞いた」「子供の頃、冬によく鳴き声を聞いた」など、ありがたい情報が何件も寄せられている。だが「巣を見つけた」という情報はない。ただ、他の鳥類と異なり、アオバトの場合は6月下旬から7月にかけてが繁殖期ということなので、もしかしたら多少の勘違いがあるかもしれない。全国的にも繁殖の観察例が少なくて、解明されていない部分が多い鳥といわれている。

1995年の6月から8月にかけて、天竜川を越えて竜東・竜西方面を往復する群れや個体を何回も確認した。時々天竜川の河川敷内のニセアカシヤの木で羽根を休めたり、飛び回る姿も観察できることからも、喬木村や飯田市下久堅・上久堅方面を行き来しているのではないかと思われる。現に私自身、下久堅・上久堅の林や竹藪で鳴き声を聞いたりフンを確認している。しかし山中での調査となると、女一人では到底無理なことなので、いつかはどなたか協力者の力を借りなければならないと思っている。

このほかに重要なのはねぐらと採食場所は何処かということである。夕方になると、飯田市上郷別府上空を通過して、西の方へ向かう大小の群れをいくつか観察できる。また20羽前後の群れが竜東方面へ向かうが、東西ともに時間は一定していない。まだ明るい4時頃であったり、かと思うと姿もぼんやりしかわからないくらいに暗くなってから飛んでいくときもある。雨降りにこの場所で姿を見かけたのは一、二度だけで、他のハトとの違いの一例でもある。

1994年から1995年にかけての調査で、皮革製品を扱う会社の駐車場にも数多く 飛来するのを確認した。そして、やはり皮革原料を塩漬けして運搬してくること もわかった。採食場所についても、どのくらいの距離を行き来しているのかと か、国外への渡りの有無、群れ構成についてなど、調べなくてはならない問題が 山積している。

アオバトの生息地で代表的な場所といえば、神奈川県大磯町の照ケ崎海岸と北海道小樽市の張碓海岸などがあげられている。日本野鳥の会神奈川支部が調査し発刊した『大磯町の照ケ崎海岸におけるアオバトの生態』1992:は、山間部で生息する飯田市松尾のアオバトとの比較もでき、非常に興味深いものがある。今後情報交換をしながら調べを進めていきたいと思う。

先ごろ日本野鳥の会研究センターより、アオバト生息調査として公式に認定するという通知があり、責任の重大さを感じている。

# 3. カワウの飛来('95~'96の冬)

1995年の12月、飯田市の天竜川右岸の松尾の堤防を、水神橋から弁天橋の方面へ向かっている時だった。上空を上流からV字形の編隊を組んで飛んでくる約40羽の鳥を見つけた。あわてて道路の端へ車を止め、双眼鏡を取り出したものの、車の通行が多くて思うように観察ができなかった。望遠カメラも構えてみたが、あっという間に下流へ向かって飛び去ってしまい、1枚撮るのがやっとだった。このとき逆光だったことも運悪く、細かい特徴などがわかりにくく残念な思いを味わった。そのくせ「V字形を組む鳥はガンである」と私は思い込んでしまったのだ。きちんと確認も取らず、その日のうちに複数の方に「天竜川へガンの大群が来ている」と報告をしてしまったのだ。ところが、その後もよく見かけるし、知人からも情報が入ってきたので、落ち着いて観察をしたり図鑑でも調べてみると、どうやらカワウらしいことが分かってきた。自分の無知と、早とちりに気付き、非常に恥ずかしい思いをした。

カワウは、体長約82cm、全体的に光沢のある黒だが、背と雨覆いは茶褐色で、 羽根の縁が黒く鱗状に見える。嘴は長く、先がかぎ型、足指は4本とも水かきで 連なっている。



写真 4 V字形の編隊を組んで飛ぶカワウ

また、営巣は樹上へ集団で行い、付近の川や池・沼などで餌をとる。集団営巣の代表的な場所として、中部地方では愛知県の知多半島にある鵜の池が有名だ。フンのために樹木が真っ白になり、果ては枯れてしまうという。だが肥料としては重宝がられているという話は、私も若いときや旅行にいったときなどに何度か見聞きしたことがある。現在では、この鵜の池付近にはトンネルも作られて、車の被害にあわないよう配慮もされている。

その後、図鑑でいろいろ調べているうちに、カワウは冬鳴かない鳥であることも知った。そういえば、あれだけの大群を見たのに、鳴き声を聞いたことがない。どんな声で鳴くのか、またなぜ鳴く必要がないのか、不思議な気持ちになった。

また後日、改めてその周辺を観察して見ると、水辺にも10数羽とか、30羽程度、時には単独の個体も確認でき、相当数が広範囲に散らばっているのではないかと思い始めた。そこで1996年2月のある日曜日、天竜川に沿って飯田市松尾から高森町方面まで調べて見ることにした。その結果、やはり予想通り、所々に小さな群れや大きな群れ、または単独行動を取る個体もいることがわかった。水辺や石の上へずらりと並び、羽根を広げて乾かしている群、水に潜って魚をとって戻るもの、かと思うと飛び立っていったりと、様々な行動を見ることができた。この日調べただけでも約80羽を観察することができ、多少の変動を考えると、100羽前後の可能性は十分ある。そしてカワウを観察しているうちに面白いことに気が付いた。

それは、この冬アオサギたちに例年とは違う行動変化が見られたことである。

- ① 毎年、冬期間中にアオサギが群で集まる飯田市松尾付近の中洲には余りいなくて、いつも数羽程度しかいなかった弁天橋から上流の中洲に、カワウと 一緒に群れていた。
- ② 非常に警戒心が強いアオサギなのに、川の中にいるときや飛翔時に新参者 ともいえるカワウと行動を共にしていることが多かった。
- ③ 例年より羽数が増えていた。いつもなら、飯田市松尾から高森町の間で、合計30羽前後だったのに対して、このシーズンは1か所だけに30羽以上もいることが多かった。したがって、他の場所で単独行動をとっていた個体や、小さな群れも合わせると40羽以上はいたことになる。

このようにカワウの出現は、私にとってマンネリ化しつつあった天竜川の鳥相に変化ができ、より楽しく、また貴重な発見もできた。カワウの飛翔を見ていると、たった5、6 羽だけのときでも、懸命にV字形を作ろうとしていた。これが本能というものなのかと思ってみたり、またけなげな姿にも映り、私は感心して眺めていた。そうかと思うと、きれいなV字形を崩して位置が入れ替わったりするときもあった。V字形を編成する意味を知らないので、機会があったら調べてみたいと思う。

先頭をアオサギが飛び、その後ろをカワウがついて行くという形や、アオサギが間に入って飛ぶこともあり、その飛び方は一定したものではなかった。アオサギばかりでなく、コサギやカラスがカワウの前後・左右に並んで飛ぶこともあった。白い鳥と黒い鳥が仲良く飛んでいるようにも見えたが、カラスの行動を見ていると、サギ類とは少し違う光景にも見られた。他の鳥に対しても同じ行動を見たことがあるが、どちらかというと、からかい半分ともとれる仕草も見られた。そんなカラス達をカワウ達がどう思っていたかは知らないが、なかなか面白かった。

天竜川にとっては、いわゆる新参者ともいえるカワウに対して、アオサギがこれ程までに心を? 許すことができるのはなぜなのか。カワウとアオサギとの関係について、素人考えではあるがこんなことを思いついた。



写真5 アオサギと一緒のカワウ

双方共に魚を餌とする鳥であることから、餌場の見つけ方、あるいは採餌方法にお互いが有利になる何か原因があるような気がする。また、どちらが先に利用し合うことを思いついたのかはわからないが、考えてみるだけでも面白い。

ある日、観察をしていたら、堤防で散歩をしていた60代くらいの男性がこんな話をしてくれた。「カワウが潜って魚を捕り損ねると、アオサギは浮いてきたのをヒョイとつまんで食べてしまう。だけど、カワウにとってはアオサギと一緒にいた方が餌場を教えて貰えるから得なんだ。アオサギだってカワウの魚を失敬できるし、お互いに便利だとわかっていると思うよ。何回も見たけど結構面白かったし、アオサギもちゃっかりしとって感心しちゃったよ」。なるほど、私の考えよりずっと具体的で観察力にも優れている。種類は違っても鳥同士の情報交換でも行っているのかもしれない。

カワウとアオサギの大群が入り混じって川面を飛翔する様は実に見事なものである。息を呑むという言葉そのものであり、私はただ見とれているだけだった。数年来アオサギの乱舞にうっとりしてきた私だったが、1995年暮から96年春にかけてのカワウと混合の飛翔はまた違った光景で嬉しかった。堤防に立ち尽くす私に向かって、これ見よがしに乱舞を繰り広げる鳥たちに感謝の気持ちで一杯になった。

過去に私が天竜川でカワウを見たのは、多い時でも年に3、4羽だった。しかし、前年の1994年には高森町の山上信雄さんが20羽を確認している。この20羽という数は例年をはるかに上回る数であり、今回はその5倍近くにもなっているわけだ。前年の20羽と今回のものとが何か関係があるのだろうか。羽数が多いことも多分記録的だと思うが、このように長期間の滞在も驚きである。正直なところ、最初の頃は「どこかへ行くつもりで、ちょっと休憩に立ち寄っただけなんだ。どうせすぐにいなくなるんだろう」と、思っていたからである。

1996年2月17日は、午後から大雪になった。この大雪の中にカワウたちは果たしてまだいるのだろうか。いるとしたらどうしているだろうか。そんなことを考えた私は、天竜川へ向かった。

何と、弁天港下流の水辺に、全身に雪をかぶって真っ白な姿で立っているではないか。約50羽が首をすぼめるような格好で、じっと佇んでいたのだ。暖かい地方で生活する鳥だとばかり思っていたので、またしても意外な思いだった。このカワウ達は過去にもどこかで雪というものを体験したことがあるのだろうか。雪

の河原で寒さに耐えているような姿を見て、なぜか感激してしまった。

そういえば余談ではあるが、ある日観察に同行した末娘が、立っているカワウを見て「随分姿勢の悪い鳥だこと。あれでは体によくないよ」と冗談まじりでいっていた。

結局カワウ達は、天竜川で冬の間4か月を過ごしてしまったのだ。春の訪れとともに徐々に数を減らしていき、4月の中旬までには姿を消してしまった。繁殖の時期を迎え、きっと安心して子育てができる場所へと移動していったことだろう。以前はどこにいたのか、そしてその場所に何があったのか、わからないことばかりである。再び天竜川へやって来るのだろうか。たった一度きりの飛来に、天竜川の鳥相変化云々を語るのは気が早いかもしれない。しかし、様々なことを考えながら、カワウ達と再会できることを楽しみにしている。(1996年11月現在)

# 4. 昔の下市田河原

高森町の福島光三郎氏が「信州日報」という地元の新聞に次のような詩を寄せていたので、許可を得て紹介してみたい。

昔の下市田河原

慶長の検地があった頃の(1600年)下市田河原 その百余町歩は その名のごとく天竜川の本瀬と支流 沼や淵 葦原の散在する全くの河川敷であった 春さきの空には雲雀がさえずり 初夏の頃は遠くでくいなが啼き バンも千鳥もおり 天竜川の流れの上をからすが低く舞い 柳の木々に小鳥がたわむれ 川べりにセキレイが尾を振り 葦の中でヨシキリが昼も夜も鳴き続けた その頃の夜は 螢も舞い 河原は昆虫たちの安息の場所だった 天竜川の青い本流には鮎が泳ぎ

赤魚が跳ね 鯉が見られ

流れの底には ずこんぼ なまず

うなぎなど 潜んでいた

白砂で目立つ支流に

あじめどじょう しゃちほこ うむぎ

そして はやが銀鱗を光らせ しじみもいた

沼には たにし えび どじょう

からす貝 蛭 いもり 蛙 亀もいた

柳の大木の陰に大きな淵があり

うきす もろこ ふな 鯉 なまず

うなぎも棲みつき

小動物の安息の地だった

草場は 農家で飼っている馬の

飼葉の大切な場所であり

夏から秋にかけ きりぎりすが鳴き

こおろぎ いなごの住み心地のよい地域でもあった

魚を捕りに河原に下る 農民の目にふれる

紅い実のなったぐみ

こなしの灌木の茂みの陰に

とかげ 蛇が居り

いたちなど その姿を見せた

散在する木々の幹にかぶと虫が居り

蝶も蟬も 昆虫もいろいろ住み分け

広い河原は 小鳥たちの楽園ともなっていた

こうした地域でありながら

自然はその意のままに

天竜の自由な行動を許し黙認し

荒れ地と緑地の点在する地帯

農民の熱い願いを集める場をよそに

天竜川の洪水と激流は

その一切を押し流した この地に対し冷厳な自然は その意のまま かかる現象を 幾百、千年もくり返した 今 現在平穏な環境の基盤となっている青い稲田も せいぜい中村惣兵衛と 丘の上の農民が汗と血を流して造りあげた堤防が完成した 宝暦二年(1752) それ以降のことである

過去にさかのぼることが可能ならば、私も一度このような天竜川を見てみたかったとつくづく思う。

# 5. 人も鳥も

時々、鳥を調べ始めたきっかけや、それによる収入などを質問されることがある。8年前、通勤道路が通行止めになったために天竜川の堤防をはじめて通ったことから鳥との付き合いが始まったわけだが、その間には数多くの鳥たちとの出会いがあり、強い衝撃や大きな感動も味わった。

# 1)食物連鎖とはいいながら

堤防上でアオサギを調べているときだった。下流から1羽のトビが猛スピードで飛んできた。トビの足元から白いものがひらひらと落ち、ピイーピイーという声も聞こえてくる。「あれ、何だろう」と思っている間に、トビの後方から2羽のセグロセキレイがチュインチュインと鳴きながら追いかけてきた。「あっ、セグロセキレイのひなが捕らえられたんだ」私が叫んだのと同時に「あれはトビにひなを捕らえられた親鳥が追いかけているのかな?」という声が堤防の土手から聞こえた。若い男性が二人、仕事の途中に車を止めて土手で休んでいた様子。「セグロセキレイの親鳥がひなを取り返そうと必死で追いかけているんだに」と説明すると、「俺なんだか泣けちゃいそうだな」「本当だよな、人間の親よりもよっぽどすごいよなあ」と、二人の若者は口々にいい、トビとセグロセキレイの行方を見上げた。ちょうど頭上を通過するとき、白くてふわふわしたものが落ち

-24 -

てきた。手で受けてみると、それはトビの鋭い爪に捕まれたひなの羽毛だった。 自分より何十倍もある大きなトビ目がけて、子供を奪い返そうと突進していく2 羽の親鳥の姿にも、私たち3人は成す術もなく、ただ溜息をついて見送るのみ だった。

これが自然界の摂理というものなんだと理屈では分かっていても、いざ目の当たりにすると、母親の身である私にとって、やはり衝撃は強い。唯一救いだったのは、この一瞬の出来事を目撃した二人の若者から、弱者への哀れみの心や優しさをかいま見ることができたことだ。

# 2) 放置された釣り針

ある小雨の日に、天竜川にかかる水神橋を松尾方面に向かって通過していると きのことだった。いつもの癖で、窓からちらちらと流れの方を見ながら走ってい ると、下流の中洲に何やら異様な気配を感じた。というのは何かがもがいている ように見えたのだ。橋を渡り終えると堤防へと急いだ。悪い予感に、まさかと思 いながらも双眼鏡をのぞいた。予感が的中して、そこには何かに絡まってもがき 苦しむアオサギの姿があった。そしてもっと私をあわてさせたのは、そのアオサ ギを取り巻くカラスの群れを見たときだ。カラスより数倍大きいアオサギだが、 今目の前にいるアオサギはほとんど抵抗できない状態でいる。カラスにとっては 絶好のチャンスなのだ。ちょんちょんと横っ跳びしながら、少しずつ近付いてい く。だがアオサギの方も必死だ。首を持ち上げたり羽根をばたつかせ、時には 「グヮーッ」と大きな声で威嚇する。その度にカラスは舞い上がったり少し後退 りする。だがすぐにアオサギを取り巻いて、いまにも襲いかからんばかりの勢い だ。数も増えてくる。心臓が鳴り、手足が震えるのを感じた。「早く何とかしな ければ…。どうしよう」と思いながらも、とっさに飯田市美術博物館へ助けを求 めることを思いついた。近くの工事事務所へとびこんで事情を説明し、電話をお 借りした。幸いにも岸元良輔学芸員(現長野市、長野県自然保護研究所勤務)が 快い返事をしてくれ、間もなく駆けつけてくれた。その間に雨足は強くなり、川 も水量が増してくる。

どこから中洲へ渡ろうかと川辺で右往左往しているときだった。中洲を一人の 釣人がこちらへ向かって歩いてくるのが見えた。慌てて双眼鏡をのぞくと、知り 合いのMさんだった。大声でアオサギを連れてきてほしいと頼んだ。カラスは驚

— 25 —

いて四方八方に散り、Mさんはアオサギの羽をつかむとひょいと持ち上げ、川を ざぶざぶと渡ってきた。途中アオサギは少し暴れたが、無事私たちのもとへ届け られた。

足下に置かれたアオサギの姿を見て私たちは一瞬声も出ないくらい驚いた。なんという姿なのだ。長い足には釣り針が刺さり、赤い血が流れている。そして釣り糸は足から首、嘴にまで巻きつき、もがけばもがくほど絡まってしまうのだ。私が首・足・羽根を固定し、岸元学芸員が釣り針を抜き、糸を切り離した。糸を取り除いてみると、体長90cm、翼長150cmといわれる中でもかなり大型のアオサギだった。暴れるときの力強さ、たとえ衰弱しているとはいえ、必死で抵抗するからたまらない。「大丈夫だよ。もうすぐ楽になるでな」そういいながらこちらも必死で押さえた。釣り針は曲がっている上に何本も付いていて、焦れば焦るほど思うように外せないのだ。その頃には雨は土砂降りになっていた。二人ともずぶぬれで、雫が体からぽたぽたと落ちる。でもそんなことよりアオサギを楽にしてやることが先決だ。私たちは夢中だった。あれほど近くでアオサギを見たいとか、一度触ってみたいなどと思っていたのに、こんな形でアオサギに触るとは、あまりにも悲しい。

釣り針による被害のことを心配しないではなかった。時々新聞やテレビで報道 もされており、気にはなっていたのだ。

しばらくして、釣り糸が全部はずれたとき私の手がゆるんだ。するとアオサギは自分から水の中へ転がるような格好で飛び込んだ。流されると思ったが、何とアオサギはスックと立ち上がったのだ。「よかった。本当によかった」と、心から喜んだ。偶然に通りかかったMさんと、岸本学芸員の協力がなかったら、私一人では絶対に助けられなかった。だが、もしかしたら、これは自然の摂理に反しているのだろうか。しかし、寿命が尽きて、というのとは訳が違う。モラルの低下した釣人によって被害を受けたものだ。あれから数年経過した今も、あの悲しそうで、何かを訴えるかのようなアオサギの目を忘れることができない。もし言葉を話すことができたら、あのときのアオサギは私たちに何を言いたかっただろうか。

その後も、高森町の山上信雄さんが、やはり天竜川で同じような状態のアオサギを救助している。またビニール紐に絡まったアオサギの死骸がぶら下がっている樹木も見たことがある。「水辺の哲学者」という異名を持つ鳥にしては、あま

— 26 —

りにも哀れで残酷な姿だった。

翌年、10月中旬にNTT飯田市支店の社員の皆さんが、飯田市松尾の天竜川弁天橋近辺で河川の一斉清掃を行った。「クリーン作戦」と名付けて、前年から行っているという話だった。そこで、部外者ではあるが私も参加させてもらうことを思いつき、担当者から許可をもらった。

当日、弁天港には社員とその家族が100名以上集合していた。私は前日、河川敷に捨てられた釣り針で、鳥類が傷ついたり死んだりするケースが多いことを担当者に説明してあったので、当日、担当者から参加者にも同じ説明をする機会を与えてもらうことができた。数カ月前にアオサギを救助した際に外した釣り針



写真 6 水辺の哲学者の異名をもつ アオサギ

と釣り糸を見てもらいながら現状を訴え、収集への協力をお願いした。草の中や 水辺に、茶色に錆びたものや、まだ捨てられたばかりと思われる新しいものなど が所かまわず放置されていた。

「これはひどい。こんな針が刺さったら鳥は自分では外せんもんなあ。死ぬしかないよ」こんな言葉が参加者の間から聞こえてきた。

だが悲しい観察例ばかりではない。

水辺や中洲で首をすくめて休息している姿は、まるで人間が佇んでいるかのようにも見える。以前、飯田市上久堅小学校の子供達数名を何回か観察に連れていったことがあった。中洲に15羽くらいがずらりと並んでいても、見慣れている私には肉眼でも確認できるが、見慣れていない子供達には石や砂と同色のアオサギを見つけるのは難しい。双眼鏡やフィールドスコープを使って探させてみた。見つけたときに先ず口にした言葉は「あれがアオサギ? 人間が立っているみたい」「あれは鶴じゃないの?」である。その後たいてい「大きい! 天竜川にこん

なに大きい鳥がいるとは知らなかったなあ」という。そして飛翔する姿には「うわ! 大きーい」「鶴みたいできれい」などと様々な表現をしてくれる。かつての自分を見ているようだ。

そこで少し偉そうに、鶴とアオサギとの違いを飛翔している姿で説明してみた。首を伸ばすのが鶴、S字形に曲げるのはアオサギであることを知り、子供達の目が輝く。「へえー」とか「ふーん」などといって再び双眼鏡をのぞき、「よし! 今度はわかったぞ」と得意顔を見せてくれる。こんなときが私にとっては最も楽しくてまた嬉しい一時でもある。

こんな面白い光景にも出合ったことがある。冬の寒い日、堤防上で観察しているときだった。流れの中の石の上に立っていた1羽のアオサギがつるりと滑って水の中に落ちたのだ。私は「えーっ! 鳥が落ちるなんて…」と半信半疑だった。慌てて羽ばたきをくり返し舞い上がると再度石の上へ。しばらくすると今度は石の上でふらふらしている。そしてまたチャポンと落ちた。「あーあ、ドジなやつ」と私は独り言をいいながらおかしくてたまらなかった。だが無理もない。石が凍っているために、真直に立っていられないのだろう。それでも中洲へ移動しないのは採餌が目的だったのかもしれない。車の中でヒーターをかけていてもガタガタと震えるほど寒い日だったが、寒さを紛れさせてくれるようなひと時だった。当のアオサギには気の毒な気がしないでもないが…。

時には上空から中洲を目指してサーッと下りてきて、いざ着地というその瞬間に、なんと前につんのめってしまい、対岸で見ている私の方が「オット、ト、ト」と叫んでしまったこともある。人間なら非常に恥ずかしい場面になるところだが、果たしてアオサギの胸中はどうだったのだろうか。そのときの回りのアオサギやカラスの反応も結構面白かった。着地するはずの場所からかなり外れてツッツという感じで小走りし羽をばたつかせていたので、すでに休息していたアオサギやカラスの群れが驚き、「グヮー」とか「クヮックヮッ」という声を上げ、一斉に舞い上がった。そして再び元の場所へ戻ると、戸惑っているかに見えるそのアオサギに向かって、抗議とも威嚇ともとれるような行動をとったのである。彼等にしてみれば、日向ぼっこをしながらウッラウッラしていた折角の休憩時間を邪魔されて、かなり迷惑を被ったというわけなのだろう。

上空を優雅にゆったりと飛翔するあの美しい姿や、水辺で物思いに耽っている ような格好から「水辺の哲学者」とまで呼ばれるアオサギにしては、少々お粗末 な一幕だった。何となく人間社会でも見られそうな光景だなと、少し同情的な気持ちも交えて眺めていた。

# 3) カラス

一般的に無気味といわれて嫌われるカラスも、水辺でじっと見ていると結構面 白いものだ。またその賢さには感心してしまう。

ある日、木の実をくわえた1羽のカラスが、仲間の1羽に追いかけられていた。ところが、なんと浅瀬の砂の中に木の実をかくして、そのうえ踏み付ける行動までとっていたのである。ここまで行うとは、まさに脱帽である。ビデオカメラでも持ち合わせていれば、記録に残したいほどの場面だった。

# 4) ハクセキレイ

飯田市松尾明(みょう)のキャタピラ三菱で、ハクセキレイの繁殖を観察させて もらっているときだった。巣立って間もないハクセキレイの幼鳥が心細い声で鳴 きながら親鳥を探していた。そこへ親とは違う成鳥が大きなバッタのようなもの をくわえて近付いたので、驚いた幼鳥はあっちこっちへと逃げ回る。それまで電 線上で子供を呼んでいた親鳥が一直線に下りてくると、その成鳥は姿を消した。 幼鳥は植木の茂みへ逃げ込んでいたが親鳥の方へ駆け寄っていった。この時の成



写真7 大きな口をあけて餌をねだるハクセキレイのひな



写真8 餌を運ぶハクセキレイ

鳥の行動はヘルパーといわれる行動かと思ったが、その後続けて観察していないので、なんともいいかねる。

またこれとは別の観察例もある。先と同じ会社の構内で、やはりハクセキレイの幼鳥が、自分の親ではない餌をくわえている成鳥を懸命に追いかけていた。この時は成鳥の方が、執拗に追いかけてくる幼鳥から逃れようと懸命だった。どうなるのかなという気持ちで楽しみながら観察していると、成鳥の方は自分の子供を呼びながら大きなキャタピラの間へ入っていき、巣へ戻った様子だった。

最近、長野県内のハクセキレイが分 布域を広げ、かなり南部まで繁殖が確 認されるようになった。1991年5月、

天竜川上流工事事務所から委嘱されて結成した「天竜川上流域鳥類生態調査グループ」に私も加えられて天竜川の各所で調査を行った。当時飯田市上久堅小学校に勤務していた大原均先生(現在豊丘北小学校)が、下伊那郡高森町出砂原の天竜川で、明神橋の橋桁の裏側へ餌を運ぶハクセキレイを二番い確認した。グループの一員として同行していた私も、橋から少し離れた場所から観察し、グループ解散後も独自で繁殖について観察を続け、相当広範囲にまで及んでいることも確認できた。その多くは高い人工建造物などへ営巣することもわかり、調査中特にお世話になったのが先述のキャタピラ三菱の方々である。天竜川から餌をくわえた成鳥を追っていくうちに、キャタピラ三菱の修理工場へ入るのが見えた。事務所で許可を頂き、観察を始めた。この会社の従業員の一人で、中村さんという方が数年前から修理工場の屋根での繁殖を確認し、毎年巣立ちまで見守っていたことがわかった。ヒナを見たくても10m以上もある鉄骨の屋根へ上る自信のない私に、知人の宮田さんと中村さんが、作業用のクレーンやフォークリフトを作動させて観察できるように配慮してくれた。その後も頻繁に出入りする私

に、従業員の方々全員から好意的に接して頂くことができ本当にありがたかっ た。

ちなみに現在ハクセキレイは、秋から春まで、飯田市松尾にある Kホームセンターの駐車場に設置されている大きな看板の中にねぐらを置いている。日暮れが近付くと少しずつ数を増し、1993年には、最大羽数は約120羽にもなった。翌朝、夜明とともに飛び立ち、大半が松川や天竜川方面に向かう。この場所は交通量の多い道路に面し、かなり賑やかだが、空洞になっている大きな看板はねぐらとして最適らしい。お店では「なにしろ駐車場内のため、御客様の車にかかるフンが少し気がかりだ。」と店員さんが話してくれたが、夜間のみの滞在なので、何とか大目に見てほしいと願っている。

なお南進を続けている分布については、1994年現在のところ飯田市竜丘長野原まで確認できているが、南下の傾向が見られるので、いずれは川路・天竜峡方面へも広がるものと思う。豊丘北小学校の桐生尊義先生が更に調査を続けているので、新しい記録が報告されることを楽しみにしている。

# 5)カモ

飯田市下久堅の上虎岩地区に、目名振(めなぶり)という小さな集落がある。そこには一般に「目名振の堤」と呼ばれる小さな溜め池があり、カモ達が集まってくる。留鳥のカルガモを中心にマガモ・コガモが飛来するが、3種類とも季節によって数が異なる。日中は池の隅で休息しているが、日没の頃種類別に池の中心へ集合し、「グヮッグヮッ」と賑やかに鳴きながら大半が天竜川方面へと向かう。夜間、天竜川で見かけたり声を聞くことがある。翌朝また池へ戻ってきて休息する。「グヮッグヮッ」と騒々しく鳴くカルガモ・マガモに比べ、コガモの鈴を転がすような「ピロピロ、ピロピロ」という澄んだ声が通る人の足を止めている。

5年前の調査では、3種合同の最大羽数が約110羽にもなっていた。ほんの小さな溜め池になぜこんなに集まってくるのだろうか。先ず池の一角に「ハンターの皆さんへ、この池のカモは地区の皆さんから保護されています。発砲しないで下さい。飯田市」という内容の看板が立っている。また、近くに住む佐藤さんという女性が、パン屑や鶏の餌を与えてかわいがっている。朝夕カモの姿を眺めるのを楽しんでいる様子だ。最初は見分けることを知らなかったマガモやコガモが

<del>- 31 -</del>

分かるようになって、私が訪れると次々に様々な報告をしてくれる。「イタチが出るようになって数が減った」とか「棒を投げ込んだ子供を注意した」「鉄砲を持った人が池の回りをうろうろしていたから、看板が読めんのかと言ってやった」など、相当カモたちを大事にしていることが伺える。だが、付近一帯には水田が多いことから「田植えを終えたばかりの苗を倒して困る」とか、「稲穂を食い散らかして困る」という苦情も出たことがあるという。佐藤さんの「私がやっているカモの餌付けは、皆に迷惑をかけていることになるかも知れんなあ」と心なしか寂しそうにいった言葉が印象的だった。

そんな折、池の氷が解け始めた頃、それまでどこか別のところに移動していたカモ達が戻ってきた。ところがどうしたことだろう。次々に4羽のカルガモが死んで水面に浮いていたのだ。鉛中毒か、と私の頭の中に浮かんだ。カモ類の鉛中毒が話題になっているときだったので、あわてて美術博物館へ連絡をとった。その内の2羽を岸元学芸員が冷凍した後、鳥類の鉛中毒について調査している北海道大学へ送り解剖を依頼した。3月の下旬、北海道大学獣医学部から診断書が届き、2羽ともに鉛中毒ではなく病気であることが判明した。それによると、肺のうっ血水腫及び肝腎脾のうっ血であることが記入されていた。オス・メスの成鳥だったこともわかった。一度に4羽ものカルガモが死に、それが同じ病気だったとすると、これは一体何を意味しているのだろうか。冬期間に滞在した場所と何か関係があるのだろうか。今のところ不明である。ただ、4羽とも羽根の下はガリガリに痩せて、骨と皮ばかりだったことを思い出すと、何かやり切れない気持ちになってしまう。

# 6) 天竜川ふれあいサミット

第2回「ふれあいサミット」が1995年10月下旬に開催された。これは、建設省 天竜川上流工事事務所・長野県飯田建設事務所が主催し、前年(94年)の12月に 発足したものである。スローガンに「河川美化、水質浄化、河川愛護思想の普 及、快適な水辺環境の創造等について研究または実践し、豊かな地域づくりに寄 与することを目的とする」と掲げている。したがって、飯伊の市町村において前 述の活動を実践している団体により構成されている。

当初は、飯田昆虫友の会・松川の自然を守る会・水辺環境保全復元の会・法全 寺「善意の川」・細田川せせらぎ愛護会・竜丘フロンテア倶楽部の7団体だった

— 32 —

が、1995年からは、阿南町の深見池の自然を愛する会も加入し、8団体となった。

第1回目では意見や情報交換を行い、天竜川の将来についても話し合われた。 そして第2回目の今回はそのうちの5団体の活動場所を訪れて視察し、その後で 会場へ戻ってサミットを行った。その中から2団体の活動を紹介したい。

私が住む飯田市上久堅風張の細田川せせらぎ愛護会(塩沢和一会長)は、竜東 に位置し天竜川と直接の関わりはもっていない。上久堅は飯田市の中でも過疎化 の進む600戸弱の山村で、13の集落に分かれている。約9年前から地域づくりの 一環として「鎮守の杜構想」が練られ、「十三の郷」という呼称も付けられた。 また、各集落毎の花木を決めて植えたり、各々が活性化を目指して様々なイベン トに取り組んでいる。92年に発足した細田川せせらぎ愛護会では、集落の南側を 流れる川幅3~4m程の細田川の河川清掃を行ったり、夏期には魚の放流も試み た。だが野鳥の餌になったり、大半が流されてしまい、数カ所の淵にわずかに残 るだけで、魚の住み処としてはまだ考慮すべき点が指摘されている。視察後の意 見としては、「川幅が狭い上に水量も少ない」「川の中にヨシ等の草が多すぎて魚 の居場所が少ない | 「現在の川の状態では、理想とする産卵および成育は無理で はないか」等の声があった。人によってとらえ方は異なるだろうが、「これらの 問題点をもう少し改善すれば、現在よりは残る魚も増えるかもしれない」という 意見も今後の課題としていきたい。塩沢会長は、「数年後にはこの地区の浄化設 備も整い、家庭雑排水による汚水問題が解決される。その面での期待も大きい! と語っている。

高森町自然愛護会は、結成後約18年の歴史ある団体で、動植物に関する多くの保護活動や探鳥会を行っている。私も時々活動内容を読んだり、現地を訪れる機会も多い。最近では、カワセミの保護活動を行っており、「カワセミが棲む湧水池の復元」「カワセミの人工営巣地」などがあげられる。

高森町下市田の天竜川河川敷には、カワセミにとって絶好の餌場があり、モロコ・オイカワ等多種類の小魚が棲息している。伏流水によってできた湧水池だが、93年ごろから約200m上流でカヌー用発着場の工事が始まり、この池の水涸れを心配する声がもちあがった。そこで、会ではここを鳥類その他の自然観察ができるように整備することを提案し、町と建設省に陳情した。

91年4月に会員の山上信男さんが天竜川上流工事事務所飯田出張所の小林武さ

ん(当時の出張所長)を現地に案内した折に、私も同行してその説明の内容を聞かせていただいた。その要旨は、

- ① 伏流水による湧水池の復元。
- ② 河辺林やヨシ原を残し、自然観察の場を造る。
- ③ 以前からこの場所に棲息しているカワセミが営巣できるような赤土の壁を 造る。

などであった。このように積極的に取り組む様子に大変心をうたれ、また興味深く聞かせていただいた。

やがて、94年8月にはカワセミ用の人工営巣箱が設置された。この巣箱を設置 するに当たって

- ① 水深は30cm程度にし、巣箱の前に50cm位の杭を立てる。
- ② 柳の木などが覆うような形にして屋根をつけ、巣の上の水はけをよくする。
- ③ 蛇・イタチ・洪水の被害から守る工夫をする。

などの注意事項もあげている。

巣箱の計画から尽力し観察を続けていた山上信雄さんは、95年4月、待望の営 巣・繁殖を確認した。

サミット当日の観察会のために、観察記録を抜粋して次のように紹介してくれた。

- 4月1日 湧水池南の巣箱前にある枝に止まっており、枝にはフンが大量に付着 していた。
- 4月5日 同じ場所に♂♀の2羽が長時間止まっていた。細かく観察してみると、3基並んでいる巣箱のうち、真ん中の巣の中央に上向きに深く掘られた穴があった。(中略)
- 4月29日 巣穴から白い卵のからをくわえて出た親鳥発見。ヒナの誕生が確実となる。

その後は子育ての記録になるが、5月28日には2回目の子育てが開始された。 喜びの連絡を受け、私も期間中時々訪れて観察させていただいた。「自然の繁殖は無理なのか」という声も聞かれたが、当然、本来なら自然繁殖が望ましいと 思う。しかし、場合によっては、このような形での繁殖もやむを得なくなるだろ

う。このような各団体の活動に対して、中には「ヤラセではないか」とか「不自

然でよくない」という意見もあるそうだが、すでに多くの自然を失っている現状から、今後本物の自然を残すことがいかに難題であるかを、視察・サミットを終えて強く感じている。

# 7) 河川改修に望むこと

鳥の観察を通じて、多くの方と知り合い情報交換をしたり、様々な形での協力者にも恵まれた。その中で特に幸運な出会いとして思い出される方に、1990年当時天竜川上流工事事務所飯田出張所長であった小林武さんがいる。

90年4月、高森町下市田の堤防で、河川敷内に作られたカラスの巣を調べている時1台の河川パトロールカーが近付き、話しかけられたのが最初だった。名刺をいただいた時、立派な肩書きに戸惑ったことを記憶している。

いろいろ質問される中で、現在自分が調査していることや感じていることを答え、「中洲を取ってしまうと困るのか」との質問に対しては、「そこは鳥達にとって大事な休息と繁殖の場所であること」を聞いていただいた。

帰り際に「一度事務所へ来て天竜川にいる鳥について話して欲しい」といわれた。数日後、緊張しながら訪れた私を職員の皆さんが笑顔で迎えて下さり、一安心した。小林さんが「天竜川に関する仕事をしていても、そこに住む鳥達について知らないことが多い。全部の要望には応えられないかもしれないが、何でも話してみて欲しい」といって下さったので、次の3点をお願いしてみた。

- ① 河川敷内の草刈りはなるべく繁殖期を避けて欲しい。
- ② 河川改修工事を行う時は、そこに棲息する鳥や他の生物のことも考慮し、 植物の伐採を最小限に留めて欲しい。
- ③ 人命第一は勿論だが、カワセミ類のように横穴を掘って営巣する鳥もいる ので、洪水対策の護岸のコンクリート張りを最小限にし、もし可能ならば 他の工法も考慮して欲しい。

など、こちら側の一方的で本音のお願いをさせていただいた。

それに対し、小林さんからは「当方の都合からいうと、洪水を防ぐためには、 洪水を流すための断面を侵すような中洲はないほうがいい。中洲があると樹木が 繁茂し、洪水が流れにくくなるとともに樹木は流木となって橋脚に絡み、災害が 大きくなる可能性がある。自然保護も大切であり、治水との両立を目指している が、現状では大変難しくなるのではないか」などの意見があった。確かにその通 りであり、これらの問題はいつまでたっても双方が満足できる解決法はなく、平 行線をたどるのみなのだろうか。

前述のような中洲の重要性を最も示すものとしてコアジサシの営巣がある。以前にも天竜川でのコアジサシの繁殖が注目されているという内容の話を聞いたことがあり、アオサギを観察するついでにコアジサシも調べることがあった。 高森町山吹の中洲一帯で、通常10羽前後、 $3 \sim 4$  巣だったのが、91年 4 月からの観察では、そこから下流の下市田の中洲で $40\sim50$ 羽、20巣以上を確認した。

翌年もと期待したが、残念ながらこの中洲での営巣はこの年だけで、翌年からは確認できず以前の状態に戻ってしまった。長年天竜川で水辺の鳥の観察を行っている山上信雄さんからは、最近の天竜川としては、最大で貴重なコロニーだと伺った。

コアジサシ・チドリなどは広くて安全な河原や中洲を必要とする。ところが水辺の開発工事で大型車両が頻繁に河川の中へ出入りし、決して安心して営巣できる中洲ばかりではない。自分の目で観察してみて、鳥達にとっての安全な中洲の必要性を改めて感じた。

# おわりに

天竜川にも鳥類にも、学術的専門知識を持たない私の抽い文章を読んで下さり、誠にありがとうございました。今後も従来通り、鳥の観察を通して楽しみながら、天竜川とのお付き合いをさせて頂きたいと思っています。

人工的に破壊され続ける自然界の中で、鳥達の生活は厳しくなる一方です。満腹になればそれ以上は要求しない鳥達に比べ、人間の欲望は際限なしです。地球は人間だけのものではなく、すべての動植物が共有しなければならない筈。生命のあるものにとって何が一番大事なのか、今、考え直さなければならない時期なのだと思います。だが開発に伴う自然破壊を騒ぎ立てても、実際には何かの形でその恩恵を受けている事実や矛盾を否定できません。しかし水辺の観察を通じて、人間のモラルの低下には大きな憤りを感じます。水鳥が命を落とす原因の一つに、前記の釣り針放置の問題があり、河川敷内へのゴミの不法投棄も水辺汚染の原因の一つとなっています。関心がないと、そこに何がいても何があっても目に入らない。かつての私がその通りでした。でもアンテナを伸ばすと色々のもの

が見えたり聞こえてくるものだとわかりました。鳥の観察も、続ければ続けるほど奥が深いのです。

「そんなことはあり得ない」「そんな行動をとる筈がない」「そんな時期にいる 筈がない」などの机上理論ではなく、とにかく自分の足で歩き、自分の目で観察 しなければ何も感じることができません。堤防に立って鳥の行動を追うのも良し、また、のんびりと土手に腰を下ろして舟下りのお客さんに手を振ったり、時にはただ何となく川の流れを眺めるのも良いでしょう。河川敷内の樹木から季節の変化などを調べてみるのも面白いと思います。このようなひと時に、どんな小さなものからでも何かを感じとる事ができたなら、金銭に関係なく人間として、とても幸せな事だと思うのです。

なお、このように私が調べを進めてこられたのも、初期から暖かいご指導や資料作成などにご尽力下さった大原均先生、岸元良輔先生を初め、吉田保晴先生、日本野鳥の会長野支部長の細野哲夫氏、情報提供して下さった山上信雄氏、天竜舟下り会社、何かと便宜を図って下さった天竜川上流工事事務所の皆様、飯田美術博物館の皆様、また観察の度に会社構内への出入りを快諾して下さったキャタピラ三菱、K食品製造会社の皆様、その他多くの方々のご理解とご協力があればこそ、と心から感謝申し上げる次第です。

# 参考文献

伊那谷自然友の会会報「伊那谷の自然」

信州日報

下伊那牛物会会誌

「ふれあいサミット天竜川」資料

# 福与 佐智子 (ふくよ さちこ)

1944年 名古屋市に生まれる。 三女の母親。飯田市福与自動車工業勤務。

# 所属研究会など

- \*飯田市環境チェッカー
- \* 伊那谷自然友の会
- \*下伊那生物会
- \*長野県自然保護審議委員

# 天龍川の鳥たち

			平成9年3月15日 発行
企 発	画 行	建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	長野県駒ケ根市上穂南 7 - 10 〒399-41 <b>☎</b> 0265 - 82 - 3251
著	者	福 与 佐 智 子	長野県飯田市上久堅3705-1 〒399-26 <b>☎</b> 0265-29-8785
編	集	偷北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町豊科4574-16 〒399-82 <b>☎</b> 0263 - 72 - 6061
印	刷	双 葉 印 刷 예	長野県松本市城東 2 - 2 - 6 〒390 <b>☎</b> 0263 - 32 - 2263

# 「語りつぐ天竜川 | の発刊にあたって

南アルプス、中央アルプスの高峰にはさまれて、伊那谷を北から南へ貫流する天竜川。その流域では、あり余るほどの自然の恩恵に浴して、人々は豊かな暮しを育んでいます。しかし、名にし負う"暴れ天竜"はひとたび豪雨が見舞えば、日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙をむき、人々の暮しを脅かしてきました。

天竜川上流工事事務所では、天竜川が"母なる川"として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う地域の人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の人々の多大なご協力のもと自然の脅威と闘いながら河川改修事業や砂防事業に取り組んできました。しかし、まだまだ危険な箇所は多く残されており、絶えず流域の変貌をみつめ、河川管理施設の整備と維持管理を図っていかなければなりません。

また、余暇を求める人々の欲求や環境に対する意識の高まりに伴い、治水、 利水の役割だけでなく、貴重な水と緑の空間として人々に潤いを与え、様々 な生物の生息・生育環境を形成するものとして、その役割が大きく見直され るとともに、河川が地域の風土と文化を形成する重要な要素であることが再 認識され、地域の個性を生かした川づくりが求められています。

そこで、目指すべき21世紀の社会を、災害、水資源、自然環境、地域の個性という四つの視点から「健康で豊かな生活環境と美しい自然環境の調和した安全で個性を育む活力ある社会生活」と位置づけ、洪水や渇水という非日常的現象における被害の軽減対策に加え、日常においても生物などの生息・生育の場であること、散策・スポーツなどの利用の場であること、地域の風土を構成する重要な要素であることを同時に認識し、治水、利水、環境のそれぞれの施策を展開することによる「365日の川づくり」が重要です。

「語りつぐ天竜川」は、こうした考え方に立ち、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方々に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てたいと思い発刊するものです。思い起こせば、昭和61年度の初版を発刊してから早10周年を迎え、今回発刊する2巻を合わせて46巻になります。これも偏に天竜川を愛する地域の方々、その気持ちに応えようとお忙しい中ご協力頂いた執筆者の方々の賜物です。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただい ていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所

所長 野田 徹

# 「語りつぐ天竜川」目録

- 1. 伊那谷の気象
- 2. 天竜川上流域の立地と災害
- 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み
- 4. 総合治水の思想
- 5. 総合治水と森林と
- 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷
- 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷
- 8. 村境は不思議だ
- 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷
- 10. 諏訪湖の御神渡り
- 11. 理兵衛堤防
- 12. 近世 天竜川の治水 伊那郡松島村 -
- 13. 川筋の変遷 天竜川と三峰川の場合 -
- 14. 伊那谷山岳部の降雨特性
- 15. 天竜川の橋
- 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井
- 17. 天竜川の魚や虫たち
- 18. 天竜川のホタル
- 19. 天竜川流域の村々
- 20. 小渋川水系に生きる 一人と水と土と木と 中村 寿 人 著
- 21. ものがたり 理兵衛堤防
- 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 吉澤 孝和 著
- 23. 土木技術と生物工学 生きものを扱う技術-
- 24. 戦国時代の天竜川
- 25. 天竜川の水運
- 26 物兵衛川除
- 27. 紙芝居 開墾堤防 -下伊那郡豊丘村伴野- 竹村浪の人著
- 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象
- 29. 天竜川の淵伝説 『熊谷家伝記』を中心に -
- 30. 天竜川の源流地帯

北澤秋司著 鈴 木 徳 行 著 上條宏之著 中野秀章著 松澤武著 今 村 真 直 著 平沢清人著 倉 沢 秀 夫 著 米山 啓一著 下平元護著 市川脩三著 唐 沢 和 雄 著 宮崎敏孝著 日下部新一著 北原優美編 橋 爪 寿 門 著 勝野重美著 松澤 武著 森岡忠一著 亀 川 章 著 笹 本 正 治 著 日下部新一著 市村咸人著

奥田 穣 著

赤羽 篤著

笹本正治著

米山啓一著

31. 東天竜

32. 天竜河原の開発と石川除

33. 伊那谷は生きている

34. 天竜川の災害伝説

35. 天竜川の災害年表

36. 天竜川水運と榑木

37. 水辺の環境を守る

38. 諏訪湖 -氾濫の社会史-

39. 河川工作物と魚類の生活

40. 天竜川上流域の過疎問題

41. 資料が語る 天竜川大久保番所

42. 天竜川上流 河辺の植物と植生

43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水

44. 横川山巡覧記 - 『辰野町資料第87号』より -

45. 天龍川の鳥たち

46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造

三浦孝美共著

塩沢仁治著

松島信幸著

笹本正治著

\_ \_ \_ \_ \_ \_

笹本正治編

村瀬典章著

桜井善雄著

北原優美著中村一雄著

山口通之著

松村義也著

関岡裕明著

藤森明著

医取取数去禾吕公痘

辰野町教育委員会編 赤羽 篤校訂

(以上既刊)

福与佐智子著

浮葉正親著

(発刊中)